

第1回大西記念文献賞選考経過並に論文要旨について

この文献賞は大西名誉会員の御好意により、OR関係者の比較的若い研究者に励みを与えることを意とし、OR関係の優秀な論文に対して授与するものであり、1967年に設定されたものである。

本賞の第一回受賞は慶応義塾大学工学部講師の柳井浩君に決定し1968年5月28日第11回総会において発表された。以下その経過について述べる。

第一回選考委員会は1968年4月に松田武彦選考委員長の下に開催された。今回は第一回であり、一か年間の論文に限って選考を行なうには不十分であるので、今回に限り過去三カ年にさかのぼって選考を行なった。その結果候補として四篇の論文が選出され、その中より柳井氏の“On a class of optimal stopping rule Problem” (JORSJ Vol. 8, No. 2, pp. 66~91 に掲載のもの)を選定した。不在の委員に対しては書面による賛否を問い、選考委員の賛同を得て、この旨を理事会にはかり最終決定を得た。

論文の内容はいくつかの“チャンネル”を経由して決定者（デジションメーカ）に提示される申し入れ（プロポーザル）に対する最適決定をとりあつかったものである。例えば卑近な例として、次のようなものがあげられる。市電、バスおよびタクシーを利用して会合に出席するために街頭に立っている時に上記のうちの一つがやって来た。この時にそれにすぐ乗った方がよいか、又は待っていて別のものに乗った方がよいかを決めなければならない。このような場合に最適決定をどのようにして下すかといったことが例としてあげられる。プロポーザルは時間とともに確率的に提示される事象がデジションメーカはこれをただ一回だけ受け入れることができるとする。

本論文ではプロポーザルが提示される事象の従う確率法則と、それを受け入れることによって得られる利得（フィギュアオブメリット）を時間の関数として設定する。この問題を、いわゆる最適性の原理に基づいて連立非線型関数方程式の型に定式化した。解の存在、その性質、数値解の求め方（逐次近似法）、数値例及び誤差の評価等について与えてある。

なお第24回秋季発表会において受賞を記念して本論文に関する特別講演が行なわれた。

柳井さんのプロフィール

略 歴

- 1937 (昭和12) 年 1 月 18 日生
 現 住 所 東京都品川区小川 7-4-18
 1959年 3 月 慶応義塾大学工学部計測工学科卒業
 1961年 3 月 慶応義塾大学大学院工学研究科修士課程修了 (工学修士)
 1962年 4 月 慶応義塾大学 (工学部管理工学科) 助手に任用される (大学院在学のまま)
 1967年 3 月 慶応義塾大学から工学博士号を受ける (主論文, An Introduction to the Theory and Applications of the Generalized Seidel Process)
 1968年 4 月 慶応義塾大学専任講師に昇任



第一回の大西賞が私共の身近なリーダーである柳井さんに贈られたことは、まことにうれしい限りで、大いに祝福しお喜びを述べさせていただきます。

この賞は受賞の対象となった論文が優れているだけでなく、受賞者が今後学会の中堅者となってORのポテンシャルを高め、今後の活動を期待して授賞されたことと推察いたします。受賞論文の内容に関しては審査経過におまかせし、ここでは柳井さんのプロフィールをご紹介します。

柳井さんはセンスの優れた応用数学者です。このことは彼の講義や話を聞いてみると理解できるでしょう。例えばある問題に当るときに、広く高い視野から見て本質的な条件を見い出して、本筋を邪魔しているものを取り除き上手にモデル化してゆき、また問題を解くに当たっても広く勉強し、吸収して問題に当る等しはしばしば教えられます。

しかし決して数学理論にのみ走るのではなく、具体的イメージを常に持って進め、計算をする時のことも必ず頭にえがいておられるようです。柳井さんの図、グラフや例題は彼の一流の親切さも加わって、いかによく理解されているかを十二分に示しています。

柳井さんは2年前に一般の連立方程式系を解く反復過程の収束条件とその応用についての研究で学位を受けられました。授賞対象論文はこの学位論文のあるケースへの応用を扱ったものであるということです。

柳井さんは大学では、ORなどを担当しておられますが、学生数の多い私学にあって独自の工夫された教え方をされています。手厳しい点もありますが、大学院学生などの間でも仲々人望が厚いようです。

またOR学会では、庶務幹事として数年間雑務を一手に引き受けておられ、一般の会員の見えないところでお骨折りのように聞いております。柳井さん一流の毒舌は寸鉄人を殺すおもむきがありますが、彼に面と向うとそのような感じを懐かせないの彼の人柄といえるでしょう。

大いに研究活動を進められて、学界の中堅となって後進のものをリードされることをお願するとともに、今後の御活躍を期待いたします。

(真鍋龍太郎記)